抜けた勇者の正しい世界の救い方

クッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
抜けた勇者の正しい世界の救い方

【Ｎコード】
Ｎ７９７３Ｌ

【作者名】
クッキー

【あらすじ】
超がつくほどＲＰＧ好きな男の子、九条新二は、ずっと思っていた。
「ＲＰＧの主人公になれたら」と。
しかし、夢のまた夢であったはずの夢は、ある日突然叶えられる。
魔王が巣食う世界に飛ばされ、多分何かの間違いで勇者にされちゃった新二は、なんやかんやで世界を救う旅に出る。

果たして新二は世界を救えるのか！？
っていうか元の世界に帰れるの！？
そもそも勇者って何をするわけ！？

PROLOGUE　「作者の前口上」

プロローグ　「作者の前口上」

テレビ画面には、魔王ダークエンペラー（ふざけた名前だ）という名前のラスボスが映っている。
『私こそ偉大な皇帝！　勇者気取りの人間風情が、頭が高い！！ひかえよ！！！』
ずいぶんな言われようだな、主人公。
俺は苦笑しながらイベントシーンを見守る。
『お前がダークエンペラーか！　とうとう見つけたぞ！　お前が苦しめた人たちの苦しみ、思い知らせてやる！！』
魔王のセリフ、完全無視。よくゲームソフトとして発売できたもんだ。
その後も小学生レベルの幼稚な会話は続き、いよいよイベントシーンの締めとなった。
『ならば思い知れ！　愚かなる人間よ！　我が力、とくと思い知れ！！』
言い終わると、魔王ダークエンペラーが黒いオーラに包まれる。
『俺は負けない！　俺を信じて待っている全ての人のために！！……母よ、父よ、仲間達よ！　俺に力を……！！』
主人公（確か……ゆうしゃって名前）は、白いオーラに包まれる。
いよいよ、待ちに待った戦闘シーン。
まずは様子見。普通に所持武器「エクスカリバー」（ＲＰＧではよく使われる最強武器）で通常攻撃をした。
【魔王ダークエンペラーに１０８のダメージ！！】
まあまあの防御力だ。さすがにラスボスだけの事はある。
さて、どんな攻撃を仕掛けてくるのか…
【魔王ダークエンペラーの攻撃！！　ゆうしゃに２３０のダメージ

！！】
「おいおいおい！？」
俺は思わず声に出してツッコンでしまった。
何だこのゲームバランスを無視した設定は。
ゆうしゃの体力は８９７。通常攻撃だけで４回ももたない。
仲間というものがいないのに、これはあんまりだ！
とか思っている間にも魔王ダークエンペラーの猛攻は続く。
あっという間に（攻撃をさらに２回受けただけ）体力が残りわずかになってしまった。
打開策を考える……考える……考える…
うん。無理だ。
俺は一旦勝負を投げることにした。
電源を切って、また入れなおす。
そして、今度はひたすら主人公のレベル上げに時間を費やした。

時計の針が午前３時を指した頃、俺は再びボス戦に挑んだ。
簡単に結果を言えば、楽勝だった。
体力は１３００ほどまで増え、受けるダメージは１回４０程度、さらにはこちらの攻撃は１回４００程度のダメージを与えるようになった我が主人公は圧倒的過ぎる強さで魔王を倒したのであった。
「なーんか、微妙なＲＰＧだったな」
半睡眠状態のまま、独り言をつぶやく。
紹介が遅れたが、俺の名前は九条新二（くじょうしんじ）、ＲＰＧ大好き人間だ。
Ｄから始まるアレやＦから始まるアレなどはもちろん、誰も目をつけないようなＲＰＧまで、とにかくやりまくるのが唯一の趣味だ。

え？　なんでこんな語り部みたいな話し方をしてるのかって？
そりゃ、俺が主人公だから。
だってこれは、俺が書く壮大な冒険の旅の全てを記した本だもの。
え？　ただＲＰＧやってるだけ？？　何をバカなことを。
物語はこれから始まるの！！

とにかく、俺はその無名ＲＰＧやりながら思ったんだよ。
いっそのこと俺がＲＰＧの主人公になればよかったのに。ってさ。

でも、さすがにその夢が叶うことになるとは、俺はカケラほども予想してなかったわけで……

ＰＲＯＬＯＧＵＥ　「作者の前口上」（後書き）

初めまして、クッキーですｗｗｗ

初小説です。

駄文率１００％なので期待はせずに…

あらすじとか、適当です。

内容が合うかどうかも分かりません。

でも、小説は大好きなんでがんばります。

気軽に感想とか言ってくださいね♪

第1話　「夢が叶う確率ってどんなモン？」

「新二、休みだからって寝すぎよー！　起きなさーい！！」
下から母さんの声がする。
そりゃ寝るだろ。俺には学校の宿題に加えてＲＰＧ研究で、へとへとなんだ。
けど、起こしに来られるのもなんだかウザいので、しぶしぶパジャマ姿のまま下に降りる。

「おはよー…」
「おはよーじゃないでしょ！　今何時だと思ってるの！？」
時計を見ると、１１時３０分。
確かあの無名ＲＰＧを全クリして寝たのが３時３０分だから…８時間睡眠、健康的だな、俺。
「ＯＨ！！　やっちまったぜ！」
とりあえずそう返しておけば何も言われない。
「やっちまったって、あんたねえ……もう高校生なんだから、しっかりしなさいよ」
また始まった。もう……なんだから発言。
もうこれだから母さんは余計なシワが多いんだよ（口には出さない、否、出せない）

「っていうか新二。ちょっとおつかい頼んでもいい？」
「ん？」
おつかい……何年ぶりなんだろう。
「この書類を、お父さんの職場に届けて欲しいんだけど…」
「父さんの職場に？」
俺は眉間にしわを寄せながら聞き返す。
実は俺の父さんは、４ヶ月ほど前に出張中に交通事故で死んでしま

った。
「うん。何かすごく大事な書類で、無いと困るから届けて欲しいって、この間お父さんの職場から電話来てさ…」
ふうん、ま、お父さんはそれなりの役職にはついてたみたいだし、そういうのがあってもおかしくないかもな。
「いいよ、届けてくる」

父さんの職場までは、家から30分ほどかかるところにある。
仕事の内容についてはよく分からない。興味も無かったし、父さん自身も家にいるときは仕事の話はしなかった。
ただ、その会社名『アドバンス・コーポレーション』だけは、しっかりと覚えていた。
周りよりもひときわビルの高さが高い。それだけ成功している会社なんだろうな。
少し緊張しながら、ビルの中に入る。
まっすぐに、受付の方に行った。
「あの、すみません」
かすれた声で受付のお姉さんに話しかける。
「はい、何でしょう？」
受付けのお姉さんは丁寧な物腰で対応してきた。
「九条一（はじめ）の息子の新二です。この書類を届けに来ました」
「社長から伺っております。では、ちょっと失礼」
受付けのお姉さんは俺から書類の入った封筒を受け取ると、さっと中身を確認して、

「確かに受け取りました。どうもありがとうございます」
「いえ」
俺は足早にビルを出た。

どうもあの会社は好きになれない。
何をやっているのかは知らないけど、どうも利益を追求しすぎているような気がする。
父さんも、もう何日休日を返上したか分からない。
交通事故に遭った出張だって、日曜日の出来事だった。
もちろん、事故そのものは不運だったとしか言いようが無かったんだけど、それでも俺の中のモヤモヤは未だに消えていない。

そんなことを考えながら歩いていると、いつの間にか道を間違えたようだ。
見たことも無い場所に来てしまった。
（うわーこの年で迷子はきついな）
看板が無いかと辺りを見回してみるけど、そんなものはない。
道を聞こうにも、通行人すらいない。
あるのは、見たことも無い建物だけだ。
「おいおい……ここはどこなんだ？」
口に出してみても、何も分からない。
「しょうがない……一旦戻るか」
そうして今来た道を引き返そうと後ろを振り向いた瞬間―

道だったはずの場所が、真っ黒な穴でふさがれていた。
「え……！？」
突然出てきた物体に、俺は驚きを隠せない。
しかも、地面に落ちてる葉っぱが、少しずつ、吸い寄せられてる。
「ブラックホール……！？」
吸い込む力はどんどん強くなり、とうとう俺でも耐え切れなくなってきた。

嘘だろ、俺こんな形で人生終わんのかよ……！！
必死に穴から遠ざかろうとする、でもやっぱりダメだった。
どんどんどんどん引きずり込まれていき、最終的には飲み込まれる……！！

「う、わああああああああああああああ！！！」
俺は恐怖からそう叫んだ。
吸い込まれると同時に、意識が闇の中に落ちていく…

第1話　「夢が叶う確率ってどんなモン？」（後書き）

サブタイトルからして意味不明ですよねｗｗｗ

分かり辛くて申し訳ないですｗ

第2話　Ｌｖ１　九条新二

「……い……さい……きてください」

遠くから、声が聞える。

おかしいな……俺って寝てたんだっけ？

どんどん、声は大きくなってくる。

「……起きてください！」

「うわっ！？」

俺は跳ね起きた。

ゴチン！！

「痛っ！？」

と、同時に何かにぶつかったらしい。

「いたたたた……」

声のしたほうを見ると、頭を抑えている女の子がいた。

どうやら俺はあの子とぶつかってしまったらしい。

「あの……すいません」

俺は女の子に話しかけた。

「いたた……あ、やっと気付いたんですね！　よかった！！」

女の子はホッとしたような顔で言った。

「えっと……俺、ここに倒れてたのか…？」

「はい、何か黒い大きな穴から突然落ちてきたから、ビックリしちゃいました！！」

「黒い…大きな穴」

間違いない、あそこで俺が吸い込まれたブラックホールだ。

「……ところで、あなたは誰ですか？」

女の子が俺の顔を覗き込みながら言う。

どうだろう、本当のこと言っても信じてくれるのだろうか。

「えーと……俺の名前は九条新二っていうんだ。新二でいい」

とりあえず、名前だけを言うことにした。

「シンジさん？　変わった名前ですね！　分かりました、よろしくお願いしますシンジさん！　私、コロッチ村のアイリスといいます！」

「アイリス……だね、よろしく」
俺とアイリスは握手をして、立ち上がった。
「ところで、シンジさんはどの国から来たんですか？」
「ああ……俺は日本から」
「ニホン？　聞いたことない国です…どの地域ですか？」
地域……アフリカとか、ヨーロッパとかいうやつ？
「アジアだけど…」
「アジア？　一体どこですか？」
おいおい、アジアも分からないのか？　いくら地理が壊滅状態の俺でも分かるぞ…
俺は内心の疑問を押し隠しながら、質問をした。
「じゃあ、ここは？」
「ここはフローレンス国ですよ」
フローレンス？？　聞いたこともない…
ダメだ、これじゃラチがあかない。
「あのさ……世界地図、見れるところない？」

「世界地図ですか……？　それなら、私の村の長老の家にならありますけど…」

「見せてほしいんだ。頼む」

「ええ、いいですよ……じゃあ、ついてきてください」

そう言うとアイリスは歩き出した。

俺も慌ててあとについていった。

草原を抜け、森を進むこと３０分。視界が急に開けた。

「ここが、私たちの故郷、森林の村コロッチです」

「すげえ……」

俺はその景色に圧倒された。

この村は非常に大きな木をくりぬいてそのまま家として使っている。

人々は活発に動き回り、あちらこちらで声があがっている。

その様子１つでも、かなり発展している村だということが俺にも分かった。

「ここは、世界でここにしかないジャイアントスギが生える土地で、村自体はそう大きくないんですけどジャイアントスギの貿易で大国にも引けをとらない財力を誇っているんですよ」

「へえー……文字通り、何もかも木で成り立ってるってわけだ…」

「そういうことですね……あ、長老の家はこっちです」

アイリスは人ごみの中をスイスイと進んでいく。

俺はついていくので精一杯だ。

何とかアイリスを見失うまいと必死に人ごみをかき分けると、ひときわ大きな木が見えてきた。

「ここが、長老リンダムの家です」

「はーっ……長老にもなると格が違うな…」

何というか、大きさもそうなのだが、装飾とかいろんなところが他の家よりも上品に感じる。

「さあ、こちらです」

アイリスは大きな扉を開けると、中に入っていった。

「おじゃまします…」

俺も中に入った。

「ようこそ我が家へ！！」

入ると同時に、しわがれたおじいさんの声が聞えてきた。

が、肝心の姿がどこにも見当たらない。

「あれ？　じーさんは…？」

「誰がイケメンじゃ！！」

何か、得体の知れない物体が、俺の隣にいつの間にか立っていた。

「あ、あの～」

「おう、旅の人…そなたか？　イケメンだと言ったのは」

「人違いです」

「！　手厳しいのー！！」

じーさんは両手の指の先を外側に向け、体を「く」の字に折ってたいそう驚いていた。

ようするに……マ〇オさんのびっくりポーズだと思ってくれればいい。

「で……あなたが長老ですか」

「いかにも。ワシが長老のイケメンじゃ」

「リンダムさんですね」

「手厳しいのー！！」

リンダムさんは例のポーズでまたまたビックリなさっていた。

話が進まないので、俺は早速本題に入ることにした。

「あの……俺は世界地図を見せてもらいに来たんですけど…」

「ああ、世界地図なら隣の部屋に張ってある。いくらでも見ていくといい」

「どうも、ありがとうございます」

俺はすぐにリンダムさんが指さした部屋へ入る。

「これか……世界地図って……な！？」

そこには、驚愕の光景があった。

この世界地図…日本がない。

日本どころか…中国、アメリカ、オーストラリア、全ての国がなかった。

その地図には、俺がまったく知らない形の大陸が描かれ、見たこともない海が広がっていた。

「そんな……なら、ここはどこだって言うんだ？」

「何をブツブツ言っておるのかね、旅の人」

リンダムさんが部屋に入ってきた。

「そういえば…まだ、キミの名前と…レベルを聞いていなかったね」

「……レベル？」

一体何の話だ？　ＲＰＧじゃあるまいし、レベルって……

「まあ、レベルは分かるから結構……ふむ、レベル１…ということは、キミは商人か？」

「え？　え？」

俺は全く話しについていけない。

「ひょっとして、自分のことが分からないのか……ん？　こ、これはっ！！」

リンダムさんは突然血相を変えた。

「どうしたんですか…？　ちょっと？」

ますます訳が分からなくなってきた。

「どうしたの、長老？　大きな声出して」

するとリンダムさんはワナワナと震えながら声を出した。

「大変じゃ、アイリス……この方は……この方はっ…」

え？　なんか急に敬われているけど俺。

「どうしたの？　シンジさんが何？」

「シンジさん……あなたの名前はシンジさんというのか……」

「え、ええ……そうですけど」

「さっきからおかしいよ長老。どうしたの？」

「アイリス……この方は…」

「勇者族じゃ…！！」

「うそ……！！」

２人して驚愕の表情を浮かべている。

俺は、このとき自分が何者で、勇者族とは何を意味するのか、自分の世界じゃないこの世界はなんなのか、何１つわかってはいなかった。

第2話　Ｌｖ１　九条新二（後書き）

ふあ～

かなり更新遅くなり申したＷＷ

申し訳ありませんＷ

第3話　突然勇者と言われましても（前書き）

前回までのあらすじ

ある日父の会社に届け物を渡しに行った帰りに、道に迷い、突如現れた黒い穴に吸い込まれてしまった九条新二（くじょうしんじ）は、どこだか分からない場所に飛ばされてしまう。

通りがかった少女アイリスにここはどこかと尋ねても、話がかみ合わない。そこで、新二はアイリスに地図を見せてほしいと頼む。

アイリスの案内で、森の中にある村コロッチを訪れた新二。

村の長老であるリンダムに世界地図を見せてもらったが、その地図に書かれていたのは新二が住む世界とまるで違う世界だった。

そして、リンダムが突如新二への態度を翻し、言った。

「アイリス、この方は…勇者族じゃ…！！」

第3話　突然勇者と言われましても

「おお……まさか、こんなところに勇者族が現れようとは…何たる幸運」

リンダムさんは感動の涙に震えている。

「シンジさん……まさか、勇者族だったなんて…」

アイリスまで言葉を失っている。

「あの…勇者族って？」

俺が聞くと、２人ともたいそう驚いた様子で

「なんと！　知らないのでございますか！！　失礼ながら、あなたはどこのご出身で？」

「いや、あの…えーと」

日本って言っても通じないんだろうな…

やっぱり、俺は異世界に飛ばされてしまったようだ。

「あの……信じてもらえるか分からないんだけど、異世界から飛ばされてしまったんです」

「ほう……外世界（アウト・ワールド）の出身でございますか。それなら、この世界について知らないのも無理ありませんな」

以外にも、リンダムさんはそれほど驚いてはいなかった。

「えーと、その…レベルってやつから、外世界（アウト・ワールド）ってやつまで詳しく教えてください」

とにかく、俺がどんな目にあったのかを確認する必要がる。リンダムさんが知っていることは、全部知りたかった。

「分かりました。ご説明しましょう。まず、外世界（アウト・ワールド）というのは、その名の通りこことは違う世界のことですじゃ。平行（パラレル・ワールド）する世界と言ったほうが分かりやすいかもしれませんな」

「……つまり、世界というのは1つだけじゃないと？」

「いかにも。この世界や、あなたがいる世界を含め、世界は無数に存在します。発展している世界もあれば、未だ人類が存在しない世界…その種類は世界の数だけ存在します。現に、あなたの世界とこの世界ではずいぶんと違うのでは？」

「確かに…おかしいとは思ってましたけど」

つまりは、あの黒い穴は異世界へと通じるトンネルだったわけだ。

「余談ですが、この世界には最近あなたと同じ様に違う世界から飛ばされてきた人間が数多く存在します。何もなかったところから、黒い穴が出現し、そこから人間が飛ばされる…そんな事件が、頻繁しているのです」

「そうだったんですか…」

「さて、次に、レベルの話ですが…この世界はその人の強さを表すレベルというものがありまして、それがこの世界の住人すべてに定められています。例えば…ワシは長老族の、レベル８…アイリスは、学生族の、レベル４といった感じです」

「で、俺は勇者族のレベル１ってわけですか…」

「そういうことですじゃ。ちなみにレベルはその人の行動によって得られる経験値によってあがりますじゃ。力仕事や、戦闘などであげるのが王道ですじゃ」

経験値でレベルが上がる…まるっきりＲＰＧだな。

「でも、戦闘って、誰と戦うんですか？　人？」

「もですが、もう１つ。モンスターですじゃ」

「モンスター？」

「この辺にはあまり出没しませんが…この世界には人々を襲う厄介な化け物たちがいて…それがモンスターと呼ばれるやつらですじゃ」

ますますＲＰＧっぽくなってきたな。

「しかし、この世界でレベルを上げるのは、戦いを生業（なりわい）とする戦士族や、国の衛兵ぐらいのもんでしょうなあ。他のものは遊びや腕試しで少し上げる程度ですじゃ」

「ちなみに、勇者族というのは？」

「勇者族は、その昔いたとされる魔王を討った勇者の一族といわれてますじゃ。勇者族に生まれた人間は生まれながらにして天才と呼ばれるほどでしてなあ…特に、戦闘に関しては一国の軍隊に相当するとまで言われてますじゃ」

「へえ……そんなにすげえのか…俺って」

「しかし、外世界出身（アウト・ワールド）の勇者族がいるとは思いもしませんでしたなあ。よほど、そちらの世界でも立派な人間だったのでしょう？」

「え？　いや、それはまあ…」

元の世界に帰ればただのオタクです、とはとてもいえそうにない。

それにしても、なんで俺が勇者族に選ばれたんだろう？

偶然で片付けるにはあまりにも妙な気がする。

それに、俺をこの世界に飛ばしたやつらも気になる。

何にしても、しばらくはここにいさせてもらうしかないか―

「長老！　大変です！！　山賊が現れました！！」

突然ドアが乱暴に開き、そんな声が聞えてきた。

「さっ…山賊じゃと！？」

「ジャイアントスギを狙ったものと思われます！」

入ってきたのは筋肉ムキムキのオッサンだった。

「女子供を退避させよ！　戦えるものは武器を取り、村を守るのじゃ！！」

リンダムさんは素早く指示を出すと、自らも槍を取り出し、オッサンと一緒に出て行こうとする。

ドアのところでいったん止まり、振り向いた。

「申し訳ないが、あなたにアイリスを任せても宜しいか？」

まあ、逃げるだけならなんとかなるか？

「分かりました。全力を尽くします」

「ありがとうございます！　では急いでお逃げ下さい！！」

リンダムさんは今度こそ出て行った。

「アイリス、行こう！」

「あっ……はい！」

俺が前に立って家を飛び出す。

村は山賊と思われる男達と村人が入り混じっている混乱状態だった。

「どこから村を抜けられる？」

「えっと……あそこです！」

アイリスが指差した先には、山賊がたくさんいた。

「くそ……村に、隠れられそうな場所はある？」

「……多分ありません。簡単に見つかっちゃいます」

どうすればいいんだ……！？

そして、ついに恐れていた事態が。

「おい、あそこに2人いるぞ！！」

「若いぞ！　捕まえて奴隷にしろ！！」

「くそ、逃げるぞ！」

俺はアイリスの手を取り走り出した。

どこかに…隠れる場所は無いか…！？

しかし、どこにもそんな場所はなく、次々と増える山賊たちに次第に追い詰められていった。

そして、とうとう囲まれてしまった。

「へっへっへ…もう逃げ場はねーぜ」

「おとなしく捕まれば、命は保障してやるよ」

「くっ……」

じりじりと山賊たちが近づいてくる。

それにあわせて少し下がった瞬間、何かが足にぶつかった。

「……これは」

誰かが落としたのだろうか。剣が落ちていた。

俺はそれを素早く拾い上げると、構えて一歩でた。

「おいおい、やる気かよ？　どうなっても知らねえぞ？」

「かかってこい」

こうなりゃヤケだ。せめてアイリスだけでも逃げてくれればそれでいい。

それにしても、なんなんだろう、この感覚は。

剣を握った瞬間、自分の中の何かが変わった。

緊張も、恐怖も、何も感じない。

冷静に、山賊の動きを捉えている。

「シンジさん……」

「アイリスは下がってて」

「てめえ……いいだろう。せめて苦しまないように、一瞬で終わらせてやるよ！！」

山賊の1人が、俺に斬りかかってきた。

そして、俺の世界が変わる。

「なっ……何！？」

俺は山賊が突き出した剣をいとも簡単にかわした。

スキだらけだ。

山賊の動きが、スローモーションのように見える。

俺は体をひねりつつ、自分の剣を横に薙いだ。

「がっ…！！」

山賊は、一撃で倒れた。

一連の動きを、まるで俺は最初から知っていたかのようにこなしていた。

俺は、戦い方を知っている。

この感覚は、研ぎ澄まされた集中力なのか。

「くそっ……全員でかかれ！！」

今度は山賊が一斉にかかってきた。

それでも、俺は冷静だった。

まるで、俺の中に誰かが乗り移っているようだった。

「1人目」

「ぐあっ！！」

後ろから来ていた山賊を切り伏せ

「2人目」

「うわっ！！」

横から来ていた山賊を弾き飛ばした。

その動きに、あとから来ていた山賊が一瞬足を止める。

その隙も、俺は見逃さなかった。

一気に山賊たちに突っ込むと、感覚が命じるままに剣を振るい続ける。

このとき、俺は悟った。

やっぱり、ここは俺がいた世界じゃない。

気付いたとき、俺たちを取り囲んでいた山賊は、全滅していた。

そのあとは、アイリスに家で隠れているように言って、俺も山賊との戦闘に参加した。

次々と襲い来る山賊たちを次から次へと倒し、その数も目に見えて減っていった。

やがて、山賊は状況を不利と見たようで、引き上げていった。

「ふう……」

俺は剣を放り投げて、地面に大の字になった。

すると、村人が俺を取り囲み、持ち上げた。

「な、なんだ…？」

次の瞬間、俺は高々と空中に放り投げられていた。

「勇者様ばんざーい！！」

「この村を救ってくれてありがとう！！」

「え？　えええええええ！？」

いつの間にやら俺が勇者族だという話は村中に広まってるらしい。

でも、ほめられて悪い気は当然しないわけで。

しばらくの間、俺は空中に放り投げられるがままになっていた。

第3話　突然勇者と言われましても（後書き）

いやはや、執筆って疲れますね～ｗｗｗ

今回もこの駄文を見てくれた皆さん、ありがとうございます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7973l/

抜けた勇者の正しい世界の救い方

2010年11月9日14時20分発行